
自転車の練習相手

庄垣彬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自転車の練習相手

【Nコード】

N9980G

【作者名】

庄垣彬

【あらすじ】

高校2年生の秋、小早川真一が片桐真由の自転車の練習と手伝う・
・そして・

自転車の練習相手

夕日が綺麗に郊外の住宅街を赤く染め始めてきた心地よい秋の風が頬をかすめて気持ちがいいがらにもなく、センチメンタルな気持ちで緩やかな坂を降り切ろうとしていた

市内の高校に通う2年生男子の小早川真一、

「気持ちがいなあ、こんな時は腹がへるなあ」

そんな独り言を言いながら坂の下まで来た

「今日の晩飯な・ん・や・・・・」

キイー・キイーキイー

「きやく、止めてえ」

「えっ？」

真一が振り向いた、と同時のドン

ガシャーン

「ギャー」

「いやあゝ」

「・・・」

ひと騒ぎがあった後、しばらく沈黙が流れる

「ううう」

「いたた、ごめんなさい、大丈夫ですか？」

「ううう」

「怪我したんじゃ、どうしよう、どうしよう」

自転車でぶつかってきたのが女の子

真一は一瞬、彼女を見て

（おお、かわいい）

痛みと闘いながらそんな事と思っている

「どうしよう、大丈夫ですか」

彼女はおろおろしながら周りと真一を交互に見ている

「だ、大丈夫だから」

ようやく言葉を発した

「よかったあ」

そう言って彼女は座り込んでしまった

真一が立ち上がろうとして

「いて、いてて」

体のあちらこちらが痛くて、体の隅々を触りまくる

その姿を彼女が見て

「あはははは・・・あっ、ごめん」

「ははは、大丈夫、大丈夫」

彼女も立ち上がり

「怪我ないですか？」

「うん、ちょっと痛いけど怪我はないみたい」

「よかったあ、本当にごめんなさい」

けなげに頭を下げて謝る彼女、真一は

（ゆるすよ、絶対許す）心の声

「ああ、いいよ、そんなの・・・それより君の方こそ怪我してない？」

「私は、大丈夫です」

自分の体を見ながら彼女は言う

「でも、膝を怪我してるやん、血が出てるよ」

「えっ・・・ええゝ・・・痛い」

「まって、今」

そい言って鞆、ポケットを何かないか探してみるが

「ごめん、何もないは、ははは」

「いいです、自分の使います」

彼女は残念そうにそう言って自分のハンカチを膝にまいた

「自転車、どうする？」

「ああ、どうしよう」

真一は倒れている自転車を起こし状態をしてみる

「ああ、これは、修理しな、あかん」

ハンドルが曲がり、前輪がパンク、かなりの衝撃だった事が分かる

「どうしよう」

悲しそうに自転車を見る彼女

「うーん、近くに自転車屋があるし、そこに持って行く？」

「うん、でも、お金・・・それに、時間も」

「そやけど、これじゃ動かへんし、とりあえず持って行ってから考えよう」

「うん、そうする」

痛い足を引きずる彼女が自転車を押そうとすると

「僕が押すよ」

「えっ、いや、いいよそこまでしてくれなくても、もともと私が悪いから」

「怪我してるし、自転車軽いから」

「ありがとう」

しばらく沈黙が流れ

「えーっと、なに、え、その・・・」

「あっ、私、真由、片桐真由」

「真由ちゃんか・・・いい名前だあ」

おじさんみたいに真一が言う

「ああは、おかしい」

「まあ、ははは・・・それより自転車、どこか壊れてたん」

「えっ、いや、その」

なぜか恥ずかしそうに真由はうつむく

「ブレーキが利かなかったのかな」

ブレーキレバーを握る真一

「まあ、ちよっと利きが悪いかな」

彼女を見ると、ばつが悪そうに

「実は・・・練習」

「えっ？」

「自転車の練習を」

「はあ？」

「だから、自転車の練習をしていて・・・坂道に」

「練習で坂道を、そら、よく走れるし、気持ちがいいわなって・・・
おい、危ないでしよなれない人が坂道を自転車で走るって」

「ごめんなさい、分かっていただけ、どうしても」

「まあ、いいか、怪我、たいした事なかったし、生きてるしははは」

「ありがとう」

「あつ、そんな事より名前」

「ああ、私、片桐真由やけど」

「じゃなくて、僕の名前、こ」

「小早川真一君でしょ」

「えっ？どうして」

「あつ・・・いや、その・・・ほら、学校でよく」

「ああ、学校でね・・・」

なんとなく腑に落ちないけれどそれ以上突っ込まない事にした

「ほら、あそこ」

真一が自転車屋を指さす

自転車屋に着いて

「おっちゃん、居る？」

「おう、しんちゃんか、どうした」

「これ直してほしいねん」

「ああ、どこかにぶつかったんか、ひどいな」

「直せる？」

「ああ、直せるけど、時間かかるわ、これは」

「そう」

真一は真由を見て

「どうする？」

「仕方ないし、直してもらう」

「じゃあ、おっちゃん直して」

「分かった」

「お金は・・・」

真由が小さい声で言う

「そやな、とりあえず金額出たら連絡するって事でどうや」

「そうですか、それじゃ」

おっちゃんと真由が2人で話をしている間、真一はぼーっと店に置いてある新しい自転車を眺めて

「これ、いいなあ。ほしいなあ」

と呑気な事を言っていた

「それじゃ、お願いします」

会話が終わったように真由が真一に近づいてきた

「じゃあ、行こか、おっちゃん頼むで、安くしといてな」

「お前が言うな」

2人は自転車屋を出た

「そや、怪我を、僕の家すぐそこやし寄っていく」

「えっ、大丈夫、もう大丈夫だし、それに・・・」

「いいやん、はよ、消毒しておいた方がいいし、ほら」

真一は強引に真由を自分の家に連れて行った

家の前に2人は着いた

「やっぱり、ここで」

「どうして、いいやん、早く消毒しておいた方がいいし」

「うん」

玄関の扉を開けると真一の母親幸子が洗濯物を抱えてたっていた

「ただいま」

真一が言う

「おかえ・・・えっ・・・えっ・・・ええー」

幸子は真由を見て後ずさり、そして怪我をしているのを見て

「真一なんて事を、ほんとうにごめんなさいね、この子そんなに悪い子じゃないんですよ

ただ、ちよつと頭が悪くて、何をしでかしたか分かりませんが、親として謝ります、本当にすみません」

そう言つて玄関で土下座している、そして

「ほら、何をしてるの、お前もこっち来て・・・謝らな、ほら」
そう言つて真一の頭を押さえて下げさす

「ちよ、ちよつとまで、違うって」

「何が違うの、こんな可愛い子に怪我さして、そんな子に育てた覚えはないわ、お母さん悲しい・・・ううう」

幸子は泣いている

「そやから、勘違いやつて、俺何も」

「そうですよ、おかあさん、私が悪いんです」

真由が申し訳なさそうに言う

「あら、そうなの、でも、その怪我」

「これは、私が自転車で・・・」

真由は幸子に説明した

「そうなの、いやだ、本当にね・・・真一の事だからまさかと思つちやつてごめんなさいね」

「いえ、こちらこそ、すみません」

真由と幸子は頭を下げあつてた・・・その脇で

「俺って、そんな風に見られていたの」

下駄箱に手をついて頭を抱えていた

「まあ、そんな事より、消毒液と包帯だして」

「あつ、そうね、早く消毒した方がいいものね、さあ、入って」
そう言つて幸子は奥に入つて行く

「ほんじゃ、こっち」

真一は真由を案内するようにリビングえ入って行く

「そこに座って」

「うん」

2人はソファ―に腰掛けていると

「これで大丈夫だと思うわ」

幸子はリビングに入ってきて真由の前に座る

「俺が」

パシッ・・・真一の頭に痛みが走る

「何すんねん」

「あほ、あんた何考えてるねん、いやらしい」

「何って、俺が巻いてあげようかなあって」

「女の子やで、考え、ほんまに、それでなくても顔がいやらしいのに」

「はぁ、息子に向かっていやらしいって・・・親父と似てる息子やで・・・って事は親父もいやらしいのか??」

「そう」

「えっ? そうなの」

「・・・」

真一と幸子の会話を聞いていた真由は微笑んでいた

「はい、これで大丈夫、何か飲み物入れてくるね」

そう言って幸子はキッチンの方に消えて行く

「ほんま、人前で息子の事よお言うわ」

「面白いお母さんね」

「面白い?? おかしいだけや」

「あはは」

そして玄関のほうから

「ただいまぁ」

と気だるそうな声が

「帰ってきよった」

真一の顔は曇る

パタパタパタ

リビングの入り口を女性が通り一瞬リビング内を見て素通り・・・

「えっ」

壁の向こう側で声が、リビングの入り口まで戻ってきて

「ええー……っ、誰？」

「片桐真由さん」

「お邪魔してます」

真由が頭を下げると

「ど、ど、どういう関係……まさか……」

女性が入り口の扉の枠に両手をついて

「地震が天災が起きる、この世の終わりキャー」

そう言いながら周りを見渡す

「あのなあ、何、あほな事してるねん」

冷静に真一が突っ込む

「だって、あんたが女の子を連れてくるなんて、何かが起こる前兆
としか考えられへんやん」

「違うんです、私が……」

真由は女性にも説明

「そうなの、まあ、そうやと思った」

「あのなあ」

真一は落ち込む

「えっと、名前は」

「片桐真由です」

「真由ちゃんか」

「私は、この姉で由希子、よろしくね」

「はい」

「まあ、これには、あまり近づくに方がいいと思うよ、いやらしい
から」

「だから、俺はいったい家族にどんな風に見られてるの？」

真一は深い暗闇に落ちていっているような気持ちになった

「じゃあね、ゆっくりしてって」

そう言って由希子は自分の部屋に行った

「あはは」

「何、そんなにおかしい」

「うん、おかしい」

「そう、俺、悲しい」

「でも、明るくていい家族やん」

「ははは、明るい?? 毎日こんなんやったら?」

「えっ? 毎日・・・うん」

「あのおうそんなに考えんでも」

「あつ、ごめんなさい」

そんな話をしていると

「はぁい、お待たせ」

明るい声でジュースを持って幸子が入ってきた

「真由ちゃんはこれね、あんたは、はい」

「ありがと、ございます」

「ねえ、真由ちゃん好きなアイドルってだれ?」

「お袋、初対面で何を・・・」

「あんたは、黙ってて」

真一は幸子の迫力に押されてしまってたまった

「あの、私○○さんが好きです」

「そう、私も、彼かっこいいよね、ねえ、あの映画見た」

「みました、よかったですよね」

真由はなぜかテンションがあがって行き幸子と2人でアイドル話で盛り上がる

「あの、もしもし、おふたりさん、僕が居るの忘れてません」

2人は真一の話など聞いていなくてひたすらアイドル話で盛り上がっている

おまけに、そこに着替えてきた由希子も加わり真一は1人蚊帳の外・

「俺の存在って・・・無いの??」

ソファアの端で話が終わるのを待っていた

結局3人はなんだかんだで、一時間近く話をしていた

真一は席を立ててトイレに行ったり、戻ってきて新聞を読んでもたり、興味のない女性誌を開いてみてみたりしていたそして

「あっ、もうこんな時間」

時計を見ると5時を指していた

「もう、帰らなくちゃ」

真由はソファから立ちあがり

「すみません、すっかりお邪魔してしまっ」

「いいのよ、ほんと、楽しかったし」

「そうよ、真由ちゃん、気にしないで、またおいで」

「はい、ぜひ」

と女同志で挨拶している

「じゃあ、送るよ」

そう言っ真一がリビングを出て玄関で靴を履き表に出る

「・・・・・・あれ？」

真由はまだ出てこない

「・・・・・・何してんねん」

また玄関に入って行く

「なあ、何してるの」

すると女3人で出てきて

「あんた、何してるの？」

「・・・・・・」

真一は立ちくらみしそうになる

「ほんじゃね真由ちゃん、またね」

「はい、ありがとうございます」

「真一、ちゃんと送らなあかんで」

「分かってるって言われんでも」

そして2人は真一の家を出る

真由の家は歩いて二十分程のところにあるらしい

「はあゝ疲れた」

「どうして、私めっちゃ楽しかった」

「そら、そうでしょうね」

「あっ、怒ってる？」

「いや、怒ってはいないけど・・・てか、怒ってもしゃーない」

「ごめんね、なんか」

「いや、片桐さんが悪いんじゃないよ、悪いのはあの魔女2人」

「ええー、楽しいやんお母さんとお姉さん」

「あのなあ、毎日あの二人に付き合ってたみ、引きこもりそうになるよ」

「あはは、私は楽しいと思うなあ、あんなに笑ったの久しぶりやもん」

「あっそ」

しばらく真一の家族の話をしながら歩いていた

「あつ、その角を曲がったところだから、ここでいいよ」

「そう、じゃあ」

「うん、今日はありがとう」

「そうや、自転車の練習どうすんの？」

「うん、なおるまで出来ないし、仕方ないよ」

「そやったら、僕の自転車使う？」

「えっ・・・いいの？」

「まあ、なおるまでな」

「うん」

「それと、自転車のおっちゃんから直ったって連絡あったら僕に言つて、僕が取りに行くから」

「悪いよ、そんなん」

「近いし、いいよ」

「うん、ありがとう、それじゃ」

「うん、じゃ」

2人は別れそれぞれの家に向かった

そして真一はその日の夕食時、2人の魔女（幸子&由希子）に突っ

込まれるはめに

そして真一の親父はその光景を見て笑っていた

昼間の学校、真一とその配下・・・悪友・・・友人二人と食堂で食
るように昼飯を食べていた

真一の前に2人が座り3人とも無言で

「こんにちは」

女性の声

「何、食べているの小早川君」

「へっ？」

3人は同時に顔を上げ

「おふう、かふえー（カレー）」

「美味しそう、私もカレーにしよう」

真由はカレーを取りに行く

「誰、あの子」

二人の親友はハモって言う

「片桐真由」

「で、どういう関係なん」

とまたハモって

「どういう関係って、その、なんだ、まあ」

わざと濁して真一が言うと

「ええー……」

親友二人以外に数人の同じクラスの奴が一斉に声を上げた

「えっ？」

真一と親友二人は逆に驚いて周りを見る

そして真由が席に帰って来ると真一の隣に座って

「いただきます」

と言ってカレーを食べ始める

「あのー」

真一を横目に二人が真由に話かける

「はい」

「真一とはどういう関係？」

「ああ、友達」

「友達？」

「うん、友達よ」

「はあ、やっぱりね」

その言葉を聞いた時、真一達の周りにいた同級生たちが波が引くように自分の席に戻っていった

「何、なんなんいったい？」

キョロキョロしながら真一が言う

「そうそう、こいつら俺の友達の」

真一が言いかけると

「俺、上田翔よろしく」

「上田君」

「お・俺、三橋勝也です、よろしくです」

「三橋君」

「私、2年E組の片桐真由です、よろしくね」

真由は微笑んで言う就上田と三橋はデレっつとしてやられてまった「プツ」

真一は笑いかけて口を押さえてこらえる

真由の食事が終わりしばらくみんなで話をする

男、3人の性格、普段している事とか

3人の男はそれぞれの悪い所を言いあい結局自滅していく
昼休み終了のチャイムがなり

「それじゃ、私行くね、そうそう夕方お願いね」

「おう、いいよ」

そんな会話をして去っていく真由

それを見送った後、いつの間にか上田と三橋が真一を挟むように隣に座っていて

「おまえ、なんで言わへんね、あんな可愛い子と知り合った事」

「そうや、お前だけずるいわ」

嫉妬の嵐

「いや、昨日知り合ったばかりやし」

「それやったら、なんで朝に言わへんねん」

「そやそや」

なぜか3人も周りに数人のクラスメイトが同調している

「なんや、おまえら、羨ましいのか、もしかして」

真一は上目線で彼らに言う

ボコ、パシ、ガツ

何人かから殴られてしまった・・・井上と三橋を含む

昼からの授業が始まり真一はワクワクしていた・・・教室の中の空気はなぜか殺気に満ち溢れているが、そんな事も気にならない
授業をしている教師も変な空気に気がついていた

「何があった？」

そう思いながらも授業を続ける

そして、授業も終わり放課後、真一は帰る用意を済ませ教室を出て
行こうとしていると

「どこにいくねん」

上田が声をかける

「帰るだけやで」

「まんまか・・・まあいいわ、その代わり報告よろしく」

「はあ？」

「そやし、昼間のほれ」

「ああ、あの事・・・おう」

勝ち誇ったように教室を出て行った真一、その後の教室は大変な事
になっていた事を彼は知らない

真一は一旦家に帰り自分の自転車で待ち合わせの場所に行く
すでに、真由は待っていた

「ごめん、遅くなって」

「いいよ、私も今来たところやし」

そして広くて自転車の乗ることのできる河原に来た

「ほんじゃ、まあ、一回乗ってみる」

「うん」

真由は自転車にまたがりこぎ始めるがすぐに足を着いてしまう

何度かそんな事を繰り返して最後に

ポテッ

倒れてしまう

「大丈夫かあ」

急いで真由に近寄る

「うん、大丈夫・・・難しいねやっぱり」

「じゃあ、とりあえず僕が後を持ってるから、それで一回やってみる」

「うん、やってみる」

真一は自転車の後の荷台の所を持っている

真由が自転車にまたがり静かに走りだす

ゆっくり目で走りだし

「そうそう、いい感じ」

「うん」

しばらく安定していたが体に力が入っているのかハンドルが揺れ始め

「キャー」

真由はこけそうになるけれど真一が荷台を持っていたためこける事は免れた

「ちょっと体に力が入りすぎてるみたいやな」

「うん、ちょっと怖いし、なんか力が・・・」

「まあ、仕方無いけど・・・僕の事、信じてくれる絶対、離さへんし」

「えっ？」

一瞬真由の顔が赤くなる

「あっ、だから、その、ちゃうで、に、荷台を離さへんって事やで」

真一は顔が熱くなるのを感じていた

「ああ、そ、そうやね……うん、分かったわ、小早川君の事……信じる」

なんとなく変な空気が辺りを包む

「ねえ、どうして、お兄ちゃんとお姉ちゃん顔が真っ赤なの、病気？」

どこからか小さな女の子が二人、真一と真由の前に立っていた

「ちがうよ、きっと愛の告白してるんやね、そうやろ、お兄ちゃん」

子供二人の言葉にもっと顔が赤くなる真一と真由

「ちゃ、ちゃうわ、自転車の練習してるんや、あっち行けマセガキイ」

真一は恥ずかしさのあまりマジに子供起こってしまふ

「わああん、怖いよ」

泣きながら走って行く二人の子供

「あああ、ちょっと言い過ぎたかなあ」

「そうよ、子供の言った事でそんなに……」

反省している真一、そして走っていった子供の方を見ると

「ベエー、アホ」

そう言ってさって子供あ去っていく

「あんにやろう、今度会ったら絶対いじめたる」

「あはは、まあまあ子供やし」

「そやけど、腹立つやん」

「そんな事より練習しよ」

「そ、そやな、じゃあ」

二人は練習を再開、後を持ってくれているのを安心してか真由の自転車はゆっくりだけ安定して走っていた

夕日もかなり傾き始めその日の練習を終わる事にして二人は別れるその日の小早川家の夕食時も真一は話のネタになり笑いが絶えなかった……真一以外は

「おはよ」

真一が教室に入ると上田と三橋がよってくる

「なあ、真一、昨日はどうやったん」

「そうそう、昨日はどこまでいった」

「はあ？」

「そやし、真由ちゃんと・・・なあ」

上田と三橋は見つめあいながら言う

「チャリンコの練習しただけや、何もない」

「何もないって、せっかく二人きりやったのに、何もないって」

半分笑いかけの顔で上田が言う

「あのな、いい加減その話、やめてくれへん、昨日の晩、家族にいじられたんやし」

真一は頭を抱えた

「ああ、お前のお母さんとお姉ちゃんなあ・・・そうか、じゃあ、もうやめとこ」

同情した声で上田が真一の肩に手を置いて

「がんばれよ、真一」

そして二人は真一から離れる

「何をがんばるねん」

ふと、真一は思ってしまった

その日の昼も真由は真一達と同じ所に座り昼飯を食べ、雑談の花を咲かせる

そして、真由の去り際に

「小早川君、今日もお願いね」

「ああ、まかしとけ」

「じゃあ」

そんな会話の二人を上田と三橋は羨ましそうに見ていた

放課後、河原に真一と真由の姿・・・そして陰に隠れた二人の男（上田と三橋）

「それじゃ、昨日とおんなじように」

「うん」

真一と真由が練習を始める
何度か繰り返している時、ふと真一は荷台を持っている手の力を緩める

真由は気付かず走っている

「その調子、いいよ、もう少しスピード出してみよか」

「えっ、でも」

「いから、だしてみ」

「う、うん」

真由はスピードを上げる

真一は完全に手を離し真由1人で走らす、自分は付いて行くように一緒に走った

「もう少しスピード上げてみよか」

「うん、分かったけど、小早川君は大丈夫」

「ああ、大丈夫」

真由はペダルをこぐ足に力を入れた

少しずつ自転車のスピードがましていく

（ちょっと早いかも）

真一の脳裏に不安がよぎる

自転車と真一の距離がだんだん広がる

そして数十メートル先に犬を散歩させているお婆さんが川の方を見て立っている

真由の自転車は一直線にお婆さんと犬に向かっていつている

「やばい、ブレーキ、ブレーキ」

「えっ？」

真由が後ろを向く、初めて真一が持っていてくれない事に気がつく

「ええ、どうして」

「前、前を見て」

「キヤー」

キーーーーーッ

「キャイン」

お婆さんの後をすれすれで通り過ぎた自転車は、見事に犬の尻尾を踏んでいった

「キーーーーー」

向こう側で真由の自転車がこける

「大丈夫」

叫びながら真一が真由に駆け寄ろうとした時

「ガル、ワンワンワン」

犬が真一の前に立ちはだかる

「ワンワンワン」

明らかに怒っている犬、飼い主のお婆さんは止めようとしてるが

「ワンワンワン」

「やめなさい、これ、やめなさい」

真一は犬を避けようと距離をとり真由に近づこうとすると

「ワンワンワン」

「えっ？」

犬のリードが飼い主の手から離れた

「わっ」

犬は真一めがけて走って来る

「わぁー」

真一は必死に走って犬から逃げて行く

その状況を木の影で見っていた上田と三橋は

「なに、しとんねん、あいつ」

上田が言うと

「真一って結構足速いなあ」

三橋の言葉に上田はあきれて

「アホらしいし帰ろ」

「ええ、もうちょっと見ていこ、おもしろいやん」

「見ときたかったら、そうしたらええよ、俺は帰るから」

「しゃーないな、ほんなら俺も」

上田と三橋は河原を後にした

その頃、真一は・・・

高い所がたまたまあってそこに逃げ切り、飼い主のおばさんが犬を押さえて事なきをえる

「すみません」

一応、真一が謝る

おばさんは、ぐだぐだ文句を言いながら吠える犬を無理やり引っ張って連れていった

「はあ、なんで俺？」

そんな事を言いながら真由の所に戻っていく

「はあはあはあ、大丈夫」

「痛い」

真由は自転車と一緒に倒れたままだった

「どうして、離れたの」

「いやあ、うまい事乗ってたし」

「びっくりしたよ・・・それにどこに行ってたの、怖かった」

少しふて腐れながら真由は言う

「いやあ、犬が追いかけてきて」

「あっ、さっきの犬？大丈夫やったの」

「何とか」

「ごめんなさい」

「ぼくこそ、ごめん」

真一は真由の腕を取って立ちあがらせて、自転車も起こす

「怪我はしてない」

「ちよっとすりむいただけ」

真一は真由の膝を見て

「これくらいなら大丈夫か」

「うん、大丈夫」

「ほんじゃ、今日はこの辺にしとくか」

「うん」

二人は土手の座れる所に行き腰を下ろす

「はあ、どうしてうまく乗れないのかなあ」

「まあ、体に力が入りすぎてゐるからやわ、後ろで僕が持っている時、それから離れた時はうまい事、乗れてたやん」

「それは小早川君が持つていてくれているって思つて安心してゐたから」

「だから、荷台を力入れて持つていたのは最初の方だけやし、後はほとんど片桐さんが1人で走つていたようなもんで、そやし、自信もつて、もう少しやと思ふし」

「うん、ありがとう、頑張る」

「ところで、なんでそんなに自転車に乗りたいの、別に今乗らなくても不便じゃないやろ」

「うん、そうなんやけど・・・」

真由はうつむき、言いにくそうにしている

「まあ、理由なんて人それぞれやし・・・いいかあ」

「別に、秘密にする必要ないから、実は後ろに乗せたい人がいるの」「へえ」

内心、不安がよぎる真一だけど平静を装っている

「この間、大好きな人が足を怪我して治るまで私が自転車の後に乗せてあげて、通学の時に送つてあげたいなつて思つて」

「そうなんかあ・・・じゃあ・・・がんばらな」

真一は複雑な気持ちでゐる

「あつ、もう帰らなきや」

「そやな、じゃあ、また明日にしよか」

「うん、今日はありがとう」

そして、一緒に真由の家の近くまで行つて真一は帰る

少し元気のない真一を幸子が見て

「お帰り、どうしたの、元気がないねえ・・・あつ、真由ちゃんに嫌われたあ？もしかして」

「はあ？何、言てんねん、そんなんやない、ただ・・・」

「ただ、何？」

「なんでもない、ほっといてくれ」

真一は自分の駆け出し自分の部屋に入った

「ほんま、はつきりせえへん子やあ」

呆れている幸子に

「どうしたん」

もう一人の魔女が・・・由希子がアイスをくわえながら絡んでくる

「もう、あんたは、ご飯の前やのにそんなん食べて」

「そんなんええやん、それよりなんなん」

「真一、真由ちゃんに振られたんとちゃう」

「ええーもう、しゃーないなあ、ほんまにあいつわ」

「そやろ、ほんま、情けない、あんないい子に振られるなんて」

「ほんまや」

なぜか二人の魔女は、ほくそ笑み、そして今夜もいいネタができた事に喜びを感じている

案の定、今夜も餌（真一）が食卓に付くと二人の魔女に根掘り葉掘り質問攻めにあい、食事もまともにできず、お腹のすかした状態で長い夜を過ごす事になった

翌日の昼、同じように真由が真一達の所に来て食事を始めたつまらない会話を楽しんでいるが真一は少し元気がなかった

昨夜の夕食時の攻撃に撃破された後遺症がまだ残っているようだったが、真由の顔を見て余計にダメージを受けたようだった

そして真由が去り際に

「小早川君、今日自転車が治ったって電話があつたの、一緒に行ってくれる」

少し迷ったが

「うん、いいよ」

「じゃあ、お願いね」

満面の笑みで真由は言って軽やかに去って行く

「はあゝ」

「何、ため息ついてるねん」

落ち込み気味の真一に上田が言う

「なんでも無い、てか、何もないよ彼女とは」

「はあ？どないした、喧嘩でもしたんか」

「ははは、喧嘩かあそんなんする前のはなしや、ははは」

上田は真一の中を見る目と乾いた笑いに鳥肌が立ち三橋と顔を見合
わせ静かにその場から去る事にした

「ははは、ははは」

去りながら振り返り真一を見るとまだ笑っている

「壊れたなあ、あいつ」

午後からの授業もいつもより静かにおこなわれ、そして何事もなく
終了

真一は速やかに帰り支度をして教室を出ていった

待ち合わせの場所で真由と会いそして自転車屋に向かう

真由からの一方的な話を黙って聞いている真一

時折見せる真由の笑顔、そしていろんな表情、真一の心は奪われて
しまっている

でも、昨日の事が頭をよぎる

自転車屋に着き自転車を受け取る

一旦、真一の家に行き鞆を置いて河原に行く

夕方まで練習をする、真由は少しだけ上達していて、ふらつきなが
らもゆっくりではあるけれど何とか乗る事ができてきた
そしていつものように真由を家の近くまで送って別れた
帰り道、なんとなく沈む夕日が目にしみた真一だった

次の日の放課後、真一は教室の掃除当番、うだうだと掃除をしてい
ると

「小早川君、ゴミ、捨ててきて」

「おう」

クラス的女子に言われて大きなゴミを持ってゴミ捨て場に行く

「はぁ」

ため息をつきつつゴミ捨て場に向かう渡り廊下にくる

「あっ」

そこに真由が立っていた

声をかけようと校舎を一步出ると

「真由、お待たせ」

「うん」

イケ面男が松葉つえをつきながら真由に近づいて行く

「どう、怪我の具合は」

「おう、痛みはもうない、それと、もうすぐギブスも取れるし」

「じゃあ、もうすぐ復帰できる」

「あほ、そんなにかんたんやないで、ギブスが取れてもリハビリとか大変って医者も言ってたし」

「リハビリかぁ、早く活躍しているの見たいなぁ」

真一は二人の会話をなんとなく聞きながら校舎の出口の影で立っていた

時々、二人を見る、真由は満面の笑みを男に見せている

「あいつが真由ちゃんの言っていた男か・・・俺よりちょっとかっこええかも」

明らかに負けている真一の後ろにスーツと近寄る者が

「わっ!」

「ぎゃー・・・なんやお前か」

上田が大きな声で脅かした

「なんややないで、こんなとこで何してるん」

「何って」

渡り廊下を見ると真由と男がこっちを見ている

「あっ、小早川君、どうしたの」

「おう、いやぁ、なに、ゴミをね、ちょっと」

「そう、そうだ」

真由は真一に近づいてきて腕を引っ張って男の前まで連れて行く

「この人よ、後に乗せたい人」

「ああ、そう」

なんか、ぼつが悪い真一

「こんにちは、小早川です」

「ああ、こんにちは、君がそうか、ふうん」

何か意味ありげに男は言う

「この人ね」

真由が言いかけた時

「あっそうだ・・・用事が・・・ごめん行かなきゃ」

真一は最後まで聞かず、ゴミを持ったまま校舎の方に歩いて行く

「ちょっと、小早川君、どうしたん」

真由の言う言葉も聞かないで早足に校舎の中に入ってしまった

「どうしたん、小早川君」

小さな声で悲しそうに真由はつぶやいた

「そうかあ」

男はまた意味ありげに呟いた

真一はゴミを持ったまま誰も居なくなった自分の教室に戻る

夕日が差し込み赤く染まっていた

「やっぱ、やっぱ、そうやな、俺なんか、俺なんか・・・わあ」

持っていたゴミを床にたたきつける、ゴミ袋が見事に割れ、ゴミが散乱した

真一は気にせず、窓際に立ち夕日を見る

涙が自然に流れおちる

「おい、黄昏やろう」

上田が教室に入り口で声をかける

「な、なんや」

真一は振り向きもせず涙を拭いている

「なあ、だから、お前ごときが、あんな可愛い真由ちゃんと付き合

えるわけないやん、これで分かったやろ」

「うるさいなあ」

「いいやん、あんないい男が彼氏やったら、まあ俺には負けるけど、ははは」

「それやったら、あいつより、俺の方が男前ってことやで」

「はあ？どの口がそんな事、言うてんのかな？」

上田は真一の口びるを人差し指と親指でつまんでひねる

「ううう、いだい、ばかった（分かった）ぎみのぼうがおどこばえ（君の方が男前）」

「分かったら、ええ、ほな、憂さ晴らしにいいか」

二人は肩を組んで教室を出て行こうとした

「ああああ、このゴミ、小早川君捨ててきてって言ったやん、どういう事、何か私に対して文句あるの」

ゴミを捨ててきてっていった女子が仁王立ちしている

「あれ、なんでこんな所にゴミが・・・あっ、もしかしたらゴミ捨て場で捨てたゴミがテレポートしてこんな所に」

訳の分からない言い訳をしている真一に

無言で、ほうきを持ってきて

「綺麗にして帰って、そやなかったら先生に言うから」

そう言っって女子は教室を出て行く

「はあ、なんで」

「自業自得やろ真一」

「しゃーないなあ」

真一は綺麗に掃除して、教室を後にした

その後、真一と上田、そして三橋も呼んでカラオケで爆発

少し遅めに家え帰ると幸子が爆発、食事時、由希子も加わり真一は爆死してしまった

昼の食堂、

真一と上田、三橋が食事をしている

「こんにちは」

いつもの笑顔で真由が真一の隣に座る

「・・・」

「ねえ、なに食べてんの？」

「・・・」

「ねえ、ねえ」

「・・・」

「何か喋ってよ」

「いこか」

真一は二人に声をかけ、席を立つ

「どういう事よ、どうして無視するのよ」

「まあまあ、真由ちゃん」

三橋が言う

「あんたは、黙ってて」

「はい」

「小早川君、どうして、何か言ってるよ」

「・・・もう」

「何？」

「もう、俺にかまわないでくれ」

「かまう？何がかまうよ、いつ私があなたに」

「もういいよ、ほっておいてくれ」

「理由を説明してよ、どうして」

会話は食堂内に響き渡っている

「真由ちゃん、ここじゃ人目もあるし、場所変えよ」

上田は気を使って言うと

「だから、黙ってて」

「は、はい」

上田は真由の迫力に押されてしまった

「片桐、俺は君にとって何？」

「何って」

「そやし、俺は君にとってはどんな存在なん、単なる練習相手なんちゃう」

「そんな事・・・そんな事無い・よ」

「いいよ、無理しなくても、俺・・・俺、それ以上やと思ってた、けど・・・そやし、もう」

言いかけた言葉を押さえて真一は食堂を出て行く

「小早川君、待って」

食堂は人が沢山いるが誰も何も言わない、真由の最後の言葉

「て」

が響いて消えていった

その日から真一も真由も廊下で会っても目を合わす事も会話をする事もなかった

ただ、変に緊迫した空気がただよう

数日後の休日

家でごろごろしていた真一は

「ほんまに、いい若いもんがこんない天気の日は何してんの」

幸子は真一を邪魔者扱いして

「どこか行っておいで」

「うるさいなあ、ほっといてくれ」

「親に向かって・・・」

幸子は真一にヘッドロックをきめる

「分かった、分かった、痛い、やめて」

「何がわかったじゃ、ええ、親に対しての言葉使いがなっつい」

「ごめんなさい、痛い、ゆるしてください」

幸子は力を緩める

「はあはあはあ」

「分かったか、ははは」

「うそじゃ、ボケ」

「な・に・い・もう一回言てみい」

真一は一目散に家を出て自転車に乗って走り去る

幸子は家の前まで出てきて何かを叫んでいた

難を逃れた真一はいつの間にか、河原まで来ていた

真由と練習していた場所に

自転車の速度を緩めゆっくり走る、緩やかな風を受けながら

「キヤー」

ガシャン

下の方で声が聞こえた

見ると真由が1人で練習をしていた

「いたあゝ」

真由は膝をさすって痛みをこらえている

何も言えず真一はただ見つめているだけ

「もう、どうしてうまく乗れないの」

真由は自転車を起こしながらぶつぶつ言っている

「もう一回・・・いた」

自転車を押そうとした時、膝を押さえる

「あ、あのお」

「えっ？」

「大丈夫？」

「あっ、小早川く・ん」

妙な空気が流れる

「大丈夫、膝」

「あっ、うん、すりむいただけやし」

「そう・・・あ、ちよつとやすんだら」

「えっ、ああ、そうやね、うん、そうする」

真由は自転車を置いて土手に座る

横に真一が座って・・・しばらく沈黙

「あの、この間は・・・ごめん」

「この間？」

「ああ、食堂の・・・」

「ああ、ううん、いいの、もう気にしてないから」

「そう・・・ま、まだ練習してたんや」

「うん、どうしても、乗りたいくて」

「まだ、諦めてなかったんやね、後ろに乗せる事」

「ううん、それはもう諦めた、だってお兄ちゃんが、いややって言うたし、だめやん」

「そう、おにい?? えっ? 今なんて?」

「いややって??」

「ちゃうちゃう、そこやなくて、ちょっと前」

「お兄ちゃん」

「それそれ、お兄ちゃんってだれ?」

「だから、渡り廊下で会ったやん」

「あの、イケ面の人? が真由ちゃんのお兄ちゃんなん?」

「そう、て言うか、正確には親戚なんやけどね」

真一の体から力が抜けていく

「お、俺、てっきりあの人、真由ちゃんの彼氏やと思って」

「ええ、じゃあ、勘違いしてたん」

「ああ、勘違いしてた、俺」

「そうか、それであの時・・・ふうん」

「何い」

「もしかして、やきもち焼いてた」

「ち、違う・わ、そんなんと違う」

妙な汗が真一のこめかみを流れる

「ほんと、違うの」

いたずらっ子みたいな目で真由は真一を見る

「何、その目、内のお袋に感化されたんとちゃうか」

「そうかも、見習わな、おかあさん」

「あかんで、そんなん、この世にこれ以上、魔女が増えたら大変やん」

「いいやん、小早川君の操縦法も習いたいし」

「えっ？」

「うん？」

「いや、どういう事」

「最初に会った時あったやろ、私が自転車で・・・」

「あ・ああ、あの時」

「あれね、実は練習しよって思ってここに来ようとしたの、で、あ
その坂で小早川君を見つけて、急いで自転車に乗って追いかけよ
うとして」

「はあ？」

「そやしな・・・」

真由は顔を赤らめて言葉に詰まった

「て、事は・・・」

真一も顔を真っ赤にして言葉に詰まる

「うん、前から小早川君の事は知ってた」

「いつ、から？」

「一年の時から、ずっと」

「い、一年の時？」

「うん、小早川君と一回、話してるんやで」

「えっ？ そうなん、いつ」

「去年の文化際の時」

「文化際？」

「うん、小早川君の組み劇してたんか、その時、私の組みも劇をし
てたんやけど」

「うーん」

真一は無い頭をフル回転してみる・・・が思い出せない

「で、小早川君の組みが終わりかけで、私めちやくちゃ緊張してて、
落ち着かなくて舞台裏をうろうろしてたら自分の衣装につまづいて
こけてん、そしたら、『大丈夫、怪我ない』って」

「そんな事・・・」

フル回転している真一の頭・・・ショートしかけている

「でね、『緊張してんの、大丈夫やで、舞台に出たら気持ちかいから』って言うてくれて」

「う〜ん」

「私、その時の小早川君の茶色のタイツ姿と茶色い顔見た時、笑ってしまつて、緊張が解けて」

「あ、あの〜ちょっと待って、それはもしかして木の役してた時？」

「そう、ほんと、言葉と格好が合わなくてめっちゃおかしかった」

「あっそ」

真一は少しふて腐れる

「でも、すごくうれしくて、その後も、ずっと後も気になって」

「・・・」

「知らない間にいつも小早川君の事見てた」

「知らなかった」

真由は真っ赤な顔でうつむいたまま、何も言わなくなった

「ああ、あ、ありがとう、すごくうれしい」

「うん」

「真由ちゃん」

「小早川君」

夕日が二人を包み、ロマンチックな雰囲気、二人の顔の距離が少しずつ近くなる

「あああ、キスしやはる、なあなあ、このお兄ちゃんとお姉ちゃんキスしやはるで」

「ほんまや」

二人の女の子・・・この前の子

「キス、キス、キス」

二人の女の子は手をたたきながら合唱している

「な、なんじゃ、お前ら」

「キスせえへんの？つまんない」

「なあ」

「このマセガキ、あっちに行け」

真一は真っ赤な顔で立ちあがった

「キャー」

女の子二人は叫びながら走って行く
しばらくして立ち止り

「キス、キス、キス」

「お前ら〜いい加減にしろ」

真一は追いかけてようとして、すぐにつまづいてこけた

「あはは」

真由の笑顔と笑い声が真一の心を赤く染めていた

時は自然に流れて行く

人の生活も次第に変わっていく

大人になる事で人は強くなっていく・・・はず??

真一、実家の庭にいる

あの、河原での出来事から十年の月日が流れた

「相変わらず、この家の女は人使いが荒いし」

ぶつぶつ言いながらバーベキューの準備をしている

「そやけど、庭にこんなん作って、親父も暇やな」

真一がいた頃は手入れもそこそこ、立木に覆われ土の地面の小さな庭だったが

最近、無趣味の親父が何を思ったか、趣味を持ち始めた

それが日曜大工、ガーデニング

手始めに庭にウッドデッキを作り始め、ガーデニングのスペースまで

「お父さん、手先器用なんやね」

「俺、知らなかったわ、こんなん出来るって」

「うちの家もこんなん作ろう、真ちゃん」

「えっ？俺、こんなんできひんで」

「じゃあ、お父さんに頼もか」

「そやな・・・あかん、親父に頼んだら金取られる」

「お父さんそんな事、言わはらへんよ」

「親父は言わへんけど、お袋が」

「そんな事・・・どうかな??」

「ブツブツ」

ガシャン

「痛て」

「キャハハ」

「こら、マーちゃん、三輪車で人にぶつかったらあかんやろ」

「キャハハ」

「こら」

真面目な顔で真一が怒る

「わあああん」

子供が泣き始める

「真ちゃん、そんなに怒らんでもいいやん、子供の冗談やのに」

「いいや、この位の年からしつかり言い聞かせとかんと」

「ははは、まだ早いつて」

「真由、教育に早いも、遅いもない」

偉そうにお父さんをしている真一

高校を卒業、大学も無事に出た

就職をした次の年に真由と結婚をして翌年、真由子が生まれた

「なあ、最近、マーちゃんのいたずらひどないか」

「ううん、私には何もしないし、よく言う事を聞くよ」

「そうかあ」

真由が真由子を抱いて真一の隣に立ち

「どう、火点いた」

「ああ、もうす・・・」

パシ

「痛いなあ」

「何が、どうしたの」

「今、背中たたかへんかった?」

「私やないで・・・ククク」

真由は横を向いて笑うのをこらえている

真一は真由子を見る

真由子は知らない顔でよそを見ている

「……」

「ただいまあ」

大きな声で庭に魔女二人（幸子&由希子）が買い物から帰ってきて入ってきた

「マーちゃんお待ちせ・・・真一、まだ火おこしてへんの、はよしや」

「分かってるって、もうすぐ点くし」

「マーちゃん、待っててね、どんくさいお父さんが今、火を点けてくれるから」

「うるさいなあ」

（マーちゃんはきつとこの二人の影響を受けてるんや）

そう、心の中で真一は思っていた

バーベキューが始まり5人の大人と1人の子どものウッドデッキ完成記念が始まる？？

真一のお父さんは自分の作ったウッドデッキをオカズにビールばかり飲んでい

そして、真一は・・・

「はよ、肉取って」

「はい、はい」

「ビールないで、冷蔵庫から取ってきて」

「はい、はい」

「ああ〜もお、遅いなあ、何ちんたらしてんの、はよ、焼かな」

「分かってるって」

今も魔女二人にこき使われていた

その横で真由は笑って見ている

そして、将来の有望な魔女候補が真由の膝の上で真一を見つめニヤッ

$\frac{n}{d}$

E

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9980g/>

自転車の練習相手

2011年1月12日03時40分発行